
とある学園でのことです。

dr.harry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園でのことです。

【Nコード】

N5903Z

【作者名】

dr.harry

【あらすじ】

丘の上に立つ学園では今日も事件が起こります。

【谷間のゆり。丘の上の学園】二人の少女は教室で出会います。

「あなたに友達はあるの？」教室で本を読む少女に、もう一人が話しかけました。その場面から始まるこの物語は「孤独」とは何かという軸で展開していきます。

プロローグ(1)

谷間のゆり。丘の上の学園

学校とは、子どもたちに知識をつけさせると共に「学校」という限られた空間で「社会」や「世界」をおしえるコミュニティー。そこで生活する子どもたちはひどく受動的でいて能動的。話しかけることもあれば話しかけることもある。友人を作ろうとすることもあれば、そんなことしなくたっていつの間にか横にいることだってある。子どもたちはたくさんの影響を受け、たくさん試してすこしずつ大人になっていく。

プロローグ(1) (後書き)

つたない文章ですが、少しずつ更新していきますのでお付き合いください。感想、評価などいただけたらうれしいです。

第一幕 リコリス

とある学園でのことです。

今日もひとりの女の子が自分の教室の自分の机で本を読んでいます。背丈は九歳という年齢にしてはすこし低めで、半袖で過ごせるような春真つ盛りの陽気であるというのに、制服の上からカーデイガンを羽織っています。青白く透き通ってしまいそうな肌は女の子があまり丈夫でないことを物語っています。緩やかな癖のある長い髪には、鮮やかな紫色のレースのリボンがあしらわれていました。丘の上に立つ学園の窓からは、すぐそばにある丈の低い茂みと遠くには海が見えます。女の子は窓際の日当たりのいい特等席で読書を楽しんでいました。左手にある窓を10センチほど開け放ち、燻る紅茶の香りを楽しむかのようにして春の暖かな陽気を浴びながら。

女の子は、穏やかな春の風が髪をゆらして頬をくすぐるたびに、外に目をやって緑色に光るしげみが揺れるのを眺めました。そして、優しい目をしてにこりと微笑みます。

そんな彼女のもとにある集団が近づいてきました。どうやら同じ学年の女の子たちのようです。中には同じクラスの女の子もいます。「ねえ、よろしいかしら」

女の子たちの中の一番外らそうにしてる娘が、本を読む女の子に話しかけます。本を読む女の子の知らない別のクラスの娘でした。くるくると巻いた豊かな髪は濡れたようにしなやかで、顔は陶でできた人形のように美しいです。いかにもお嬢様風のその女の子はほかの娘たちを従えるようにして胸をぴつとはって本を読む女の子の前に立ちます。

「……ん？」

本を読む女の子は偉そうな女の子の顔をじっと見た後、首を傾げました。本を読む女の子はえらそうな女の子のことをみて、かわいい娘だと思いました。きれいな髪。それを惹きたてる赤いリボン。

ととのつた顔立ち。背丈はわたしと同じくらい。きつとクラスの中でも中心的な娘なんだろうなと本を読む女の子は思います。でも・・・、なんでわたしに話しかけたんだろう？同時にそうも思いました。

えらそうな女の子はそよぐ風に乱れる髪を片手で整えながら話を続けます。

「あなた、いつもこの時間ひとりね？本ばかり読んで。友達はどこにいらっしやりますの？」

容姿に似合わない大人びた態度で、嘲笑するかのようにそう言いました。少女の目はすでに、返ってくる答えとそれに対しての言葉が映っているかのようでした。

本を読む女の子は開いたままの本をゆびさして、

「ここ」

そして窓の外で揺れる茂みをさして、

「と、あそこ」

と、ぽつりぽつりと答えました。唐突に自己紹介をさせられて、本を読む女の子はえらそうな女の子が何を云いたいのかわかりません。

えらそうな女の子は絵本で読むお嬢様みたいに高らかに笑いしました。

「ふふふ。本が友達なんておかしな娘。どうせ友達なんていないんですよ？あなたいつもひとりだものね。さびしくないの？友達がないから本とおともだち？笑っちゃうわ。ものなんて友達になれるはずないじゃないですよ。本はしゃべれないし、一緒に遊んでもくれないんですよ」

えらそうな女の子は、まくし立てるようにしてそういったあと、「でも、わたしたちがいつしよにあそんであげてもよくつてよ？」

そういつて本を読む女の子にゆっくりとその白くて小さな手を差し伸べました。それはまるで、捨てられた子猫を拾うよい家柄のお嬢様のように見えて慈悲深く。それでいて自己満足にあふれていま

した。

本を読む女の子はじつとその手を見つめると、すこし間を置いてまた本に目を移します。

「べつにいい」

「なっ！」

えらそうな女の子は眉根をよせて、信じられないといったふうな顔をします。

「なんで！？なんでですか？ひとりでいるのがそんなにたのしい？せつかくわたくしが友達になって差し上げるといつているのに、それをことわりますの？」

本を読む女の子は本に目を落としたまま一言ぼつりと、しかしはつきりといいました。

「ちがう」と。

本を読む女の子は本に落としていた目をえらそうな女の子の方に向けました。そのひとみは静かな湖のように澄んでいました。えらそうな女の子は物怖じしてしまいます。

「あなたと友達になりたくないわけじゃない。あなたは友達をばかにした」

「どっ……どこにその友達がいるっていうんですの。本は何も出来ないって……」

本を読んでいた女の子は本をパタンと閉じて落ち着いた声で話します。

「本はしゃべれないし、一緒に遊んでもくれない。でもわたしにたくさんのお話を教えてくれる。不思議なことやたのしいこと、かなしいこと。たくさん。たくさん。なによりいい暇つぶしあいてなっってくれるわ」

えらそうな女の子は鼻で笑います。

「詭弁ですわ。どちらにせよあなたには人の友達なんていない。だって、毎日この時間にここを通りますけど、あなたはいつもひとり。

今だってひとりじゃないですの」

えらそうな女の子は興奮気味に言いました。教室は静寂に包まれます。えらそうな女の子は思いました。すこしひどいことを言ってしまっただろうか？ひどい言葉に憤慨しつかみかかってくるだろうか？それとも目の前の少女は悲しみに顔をゆがめるだろうか？いつの間にか雲に隠されていた太陽が顔を出して教室を再び陽だまりに変えたとき、本を読んでいた女の子はにっこりと微笑みました。えらそうな女の子は動揺します。しかし、その笑みが自分に向けられたものでないと気がつくのにそう長くはかかりませんでした。

「ひな。お花摘んできたよー。いやあ、やっぱしあのしげみは危険がいっぱいだよ。ひなには危険すぎる！ さっきカエルがぴよーんってさあ……ん？」

ろつかの方から元気な女の子の声が聞こえてきました。

元気な女の子は女の子たちに囲まれているひなに気がついて表情を曇らせました。そして、のしのしと、カニが前に向かって歩きたいにして腕まくりしながら近づいてきます。

「やややっ！ ヘイヘイ、お嬢さん方。わたしのひなを大所帯で囲んでなんなんだい？ ひなをいじめたりしたらあたしがゆるさないんだからねっ！」

まるで太陽を隠していた雲を吹き散らした暖かな西風みたいに、元気な女の子はひなを取り囲む女の子たちを遠ざけていきます。

ヒナと呼ばれた女の子は愛しいものを見るようにしてもう一度元気な女の子ににっこりと微笑んでからいいます。

「ちがうの。レン。この人たちは私をあそびに誘ってくれたの」

元気な女の子——レンと呼ばれた彼女は引き締めた表情を和らげてひなと顔を見合わせた後、えらそうな女の子に言いました。

「へえーっ。ふうーん。……そ。ありがと。」

えらそうな女の子はレンがなぜ自分に感謝するのか理解できませんでした。

「となりのクラスのキョウウカさんだっけ？この子しゃべるのあんま

し得意じゃないからさっ。でも、これから仲良くしてね！ よかつたらわたしとも。あっ…でも、そとに誘っちゃだめだよ。この子からだ弱くてあんまり外とか出られないからっ」

レンは人差しゆびをたてて、腰に手を当てながらいいいます。

「えっ…あっ…」

そんなレンの姿を見てキヨウカは気がつきました。ひなと呼ばれた目の前にいる少女が外の茂みの方をゆび差したときに、みどりといっしょにゆれる小さなひとかげに。

ひなは動揺するキヨウカにいいいます。

「わたしはいつもひとりぼっちだわ。この時間もほかの多くの時間でもわたしにだって友達はある。数は少ないけどみんなつながってるの。だから、暇なときにあいてをしてくれる本だってわたし大切な友達よ。わたしはひとり。でも、レンをいつもとなりを感じる事ができるからさびしくない。一人だけひとり（孤独）ではないわ。あなたはどうか？ 大切な友達はある？ その横にいる娘達はしゃべれるし、いっしょに遊んでくれるでしょうね。でも大切なことを教えてくれる？ 不思議なことやたのしいこと、悲しいことを教えてくれる？ 病弱な友達のために外の世界を運んできてくれる？」

「……なっ……」

ひなの言葉にキヨウカはなにも反論できませんでした。ひなは続けます。

「たぶんしてくれないと思うわ。あなたの横にいるのはお人形さんだもの。クラスを回って集めてきたのね。でもそれはお友達？ お人形さんは物よ？ ものなんて友達になれるはずないじゃないの。友達ができないからお人形とお友達（お人形遊び）？ 笑っちゃう」

「ちがう！」

キヨウカは背中に奔る冷たいものを感じて、ただ叫びます。今立っている場所が陽だまりであることを忘れさせてしまうようなその悪寒は、キヨウカの内側から湧き出すようにして自由を奪って生き

ます。反論する言葉が見つかったから叫んだというわけではありませんでした。ただ、聞くのが我慢できなくなったのです。そして、血の気のうせた顔でキツとひなのことをにらみます。それが彼女にとつて精一杯でした。

「ちがうくない。だって、あなたがこまっているのにさつきから彼女たちは何もしないわよ。言い返してこないし、そこに立っているだけ。あなたの 友達 を馬鹿にするわけじゃないけど。その も の はあなたの友達？」

キヨウカは後ろを振り向くのが怖くなりました。

みんながどんな顔をしているのか、どんな目を、どんな表情を、どんなことを思っ何もせず立っているのか——初めて疑問に思いました。

「あなたいつもこの時間ひとりね？だって、彼女たちいつもいっしょにいるもの。友達はどこにいるの？」

「えっ……………」

キヨウカはなにも答えられません。

「ねえ。あなたひとりよ？さびしくないの？」

第一幕 リコリス（後書き）

つづきますので、見てくれたらうれしいです。

第二幕 デイジー / リリー

「ねえ、ひなあ」

元気な女の子——レンは大きなリボンの女の子に話しかけます。

「なに？ レン」

大きなリボンの女の子——ひなは白詰草で冠を作る手を止めてレンに応えました。

「あの子。さつき怒ってた？」

ひなは白詰草を再度編み始めました。

「怒ってなんかないわよ。ぜんぜんね。これっぽっちも」

「ふん」

ひなは隠し切れないあどけない声で、すこし大人ぶって言いました。レンは心の根に何かを隠しているような表情で相槌を打ちます。ふたりはひなの席で、先ほどレンの摘んできたお花を編んで飾りを作っていました。ついさつきまでいたえらそうな女の子は青ざめた顔をして走って逃げていってしまい。取り残された女の子たちは、本当に遊んでくれる持ち主のいなくなった人形みたいになって、しばらく呆然とした後方々に散っていきました。波濤のように押し寄せた状況の大きな変化は波が引いていくようにして一気に収束し、それと対照的に外の穏やかな風景は何一つ変わりません。ふたりの会話はゆっくりと続きます。

レンはひなのことをじいっと見てからいいました。

「うそつき」

「……………」

ひなの手はまた止まりました。そしてレンの目を見つめ返そうとして、できずにそらします。

「なんで……………わかったの」

ひなはまるで一世一代の完全犯罪のトリックを見破られたかのように落胆に沈み、顔を伏せて口を尖らせます。

「なんで？あつは！見ればわかるって！ あははは」

本心から笑っているレンをみてひなはすこしだけ傷つきました。わたし・・・うそつくのへたなんだ……。

「それで？何について怒ってたの？」

レンはにっこりと微笑んでひなに聞きました。

「そつ……それは……いきなりあの娘たちがわたしのリボンをぐい
ーっと……」

身振り手振りを交えて熱弁するひなのことをレンは半目で見て鼻を鳴らし、

「うそでしょ」

そういいました。

「……………」

「どうみてもそういう状況じゃなかったしね」

そうだよね。心の中でひなは浅はかな自分を責めました。

「白状するね。どうせレンに嘘をいつたって見破られるだろうし。

あのね。友達をばかにされたの。レンのことじゃないわ。その……わたしの読む……なんというか……本のこと。」

ひなはレンの様子を伺うようにして上目づかいでいます。レンは何も言わずにただ耳を傾けていました。

「それでね。怒ってすこしひどいことをいつちやったわ。でも、わたしだって泣きそうなくらい悲しかった。ものはものでもわたしの大事な友達だもの。泣くところを見られるのは嫌だから、紛らわせるために怒ったらついむきになっちゃった」

ひなの白状は終わりました。しかし、レンは無邪気に笑ってひなにさらに質問します。

「ふーん。で？なんであたしにうそついたの？」

ひなはすこしドキツとして、なにかいい言い訳がないかとひとしきり考えるように目を泳がせたあと、観念したとでもいうかのよう
に語り始めました。

「レン。あなただっっても、とっっても大事な友達よ。でも、思

ったの。あの娘の言うことを聞いて。……本は、ものだから……も
のと同じに扱われてるなんて……嫌だと思って……」

小さな静寂が教室を支配しました。暖かな風に揺れる文の低い茂
みがサアとささやきます。

「嫌だよ」

「……えっ」

はつきりと真剣にそう答えたレンをひなは驚きと失望の瞳で見ま
す。しかし、レンはにっこりと微笑んで。

「嫌だよ。物といっしょなんて嫌。もの扱いされるのも嫌。でもさ、
ひなのそれは……ちがうでしょ？」

ひなは困惑しました。ひなはレンがなにを伝えようとしているの
はわかりませんでした。

「ひなはさ、友達がものなんじゃなくて、たまたま物だった本が友
達なんですよ。それだったら、べつにいいじゃん。あたしはひなの
ことだーいすき。さつきひなもあたしのこと大切な友達って言うて
くれたよね。あたしはひなの友達。それで、ひなは本も友達ってこ
とだよね！ひなは、全然おかしいくなんてないんだから、ほら！胸
張って！あっ……でも、ごめんね。意地悪ないい方して」

ひなは目をぱちくりさせて、そして「ふふっ」とすこしだけ笑い
ました。

「ううん。実はね、わたしさつきからずっと迷ってたの。本とお友
達なんてやっぱりおかしいのかなって。自信もてなくなっちゃった
の。でも、レンのおかげでわかった気がするわ。ありがとう」

ひなは心のそこからお礼を言いました。そうしてもう一度驚きま
す。わたしのちっばけな悩みを隠すためについた嘘の悩みを解決す
る手段を示すとともに、本当の悩みまで解決してしまうなんて。

わたしが悩みを隠そうと嘘をついて、わざとへんな問いかけをし
たのもきっとお見通しなんだろな。

「そろそろ帰ろっか」

レンは元気にそういいました。そとはまだまだ明るいです。教室

の中は蛍光灯をつけていなくてもはつきりと本を読めるくらいのお天気でしたが、もう帰る時間なのでした。

「そうね。でも、今日は一緒に帰れないわ。図書館によっていかな」と

「そっかあ。じゃあね。また明日」

「あつ……ちよっとまって」

気をつかって急いで帰り支度をして帰ろうとするレンでしたが、ひなが呼び止めます。そしてできたばかりの白詰草の冠をレンにかぶせて、

「わたしの……一番は、レン……あなたなんだからね」

顔を赤らめてそんなことを言いました。「本といつしよの扱いをされて嫌じゃない？」そんな陳腐な問いかけに帰ってくる答えなんてはじめからわかってました。そんなことで悩んでいたなんて嘘だつて見破られることだつてわかっていました。何十年、何百年とたくさんのことを変わらずに教えてくれる本も大切な友達です。そうであつていいのだとレンが教えてくれました。でも、変化し続けるこの一瞬とともに歩んでくれる友達がひなにとっては一番でした。

「うん！」

第三幕 ヴィオレット

キヨウカちゃんがいなくなって、わたしたちはどうしていいのか
わからずにただ呆けていた。多くの娘たちは自問自答していたと思
う。あのとき、なんでキヨウカちゃんのために言い返して上げな
ったのかなって。ひとりでいたわたしたちと、キヨウカちゃんは友
達になってくれた。うれしかった。でも、ひなちゃんって娘の言う
ことも間違っではないなかった。わたしたちには意思がなかった。群
れていればそれでいいと感じた。誰かといっしょにいればクラスで
浮かなくてすむ。惨めにならずにすむ。いじめの対象にならずにす
む。たしかに、こんな動機で集まった人間たちが、大切なことを教
えあったりできるはずなんてない。そんな理由でいっしょにいただ
けのわたしたちは、そういう意味ではきつとお人形さんだったん
だろう。いまさらになって自分たちが情けないと思った。

「ねえ、ひな」

「ん？なに」

ひなちゃんって娘とレンちゃんって娘のお話が聞こえてきた。

「あのさあ。わたしたちっていつ友達になっただっけ？」

「いつのまにか」

「ん〜、そういうんじゃないって！いつ知り合っただっけってこと」

「レン。人間って知り合っただ瞬間から友達なの？」

「そのとおりさ！ 感じるものがあーあつたのさあー！」

「……そうね。確かわたしがレンに話しかけたのがはじめじゃな
かったかしら」

「えっ……それどこだっけ」

「忘れたの……？ まあいいわ。すぐそのそとにつながるドアの
横でレンが靴紐を結んでいるときに、わたしがお花を持ってきてほ
しいって頼んだのがはじめ。あの時は勇気を総動員してレンにはな
しかけたの。活発そうだったから、正反対のわたしの頼みなんて聞

いてくれないと思って……」

「あ。でも、あたしだって思ったよ。勉強できて、女の子らしくて、かわいいひながあたしに何の用かなーって。『目障りよ。そこどいて。私より二センチおおきいあなたの座高が私の視界を邪魔するの』とか言われるかと思ってすこしドキツとしたよ」

「……………」
「どうしたのひな？急に黙って。まさかお花を摘みに言っただけで、その口実だったとか……」

「……………」

「ひな？何か答えてよ！そんな食い倒れ人形みたいな表情で固まられてもなんもわかんないよ！ひな！？」

そっか。

わたしは気がついた。わたしたちはみんな「遊んであげてもいいわよ」なんて不器用にいう彼女に誘ってもらった。ひとり（孤独）から救ってもらったんだ。だったら何で、わたしたちはあの娘に同じように声をかけてやれないのだろうか。わたしたちはお人形さんだった。でも今は遊び相手のいないただのガラクタ。そんな今だから思える。

——あの娘と、友達になりたい。

「あそんであげる」勇気をもってそういつてくれた。あるとき大切な何かを教えてくれたあの娘の友達に。

「ねえ」

決心したわたしはみんなに話しかけた。そして、みんな同じタイミングで「ねえ」って言ったことの驚いた。

「あのさ。キョウカちゃんのこと探そう！」

「そうだね。わたし教室見てくるよ」

「じゃあわたし図書館に行く」

「それじゃあわたしは……」

わたしたちはみんなキョウカちゃんのことを探すことにした。それぞれに散っていったみんなの足取りはきつと軽いだらう。だっ

てわたしの足が軽いんだから。誰がはじめにキヨウカちゃんに話しかけられるのか競争するみたいない勢いでみんな教室を後にした。

友達になれたとしても、あの娘はけっこうわがままだから、当分先まであの娘にとってわたしたちは振り回されるお人形かもしれない。でも、大切なことを教えられるお人形さんになるう。

ひなちゃんって娘も、ものだって友達って言ってたし。

第四幕 ピンク

「今日はとても楽しかったわ」

大きな紫色のリボンの女の子はやさしく声をかけました。

「あなたって、とっても面白いのね」

その声はふたり以外誰もいない、古びた茶色が印象的な図書館に響きます。

「はじめ見たときはね、すこし汚かったからちよつとなつて思ったんだ。でも、ひとは見かけによらないつてかんじかしらね・・・でも今日はこれでお別れ」

女の子の背中はずこしでしたが震えていました。女の子はそれをしっかりと抱きしめます。

「ありがとう。楽しかったわ。ずっとずっと忘れない。あなたのことを友達じゃないつて言った人がいたけど、わたしたちはずっと友達。あなたとの出会いも、あなたから教えられたことも、あなたの思いでもずっとずっとわたしの大切なたからもの」

女の子は大粒の涙をこぼします。

「大好き」

そういつて女の子は図書館のソファの上にそれを置いて去っていききました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5903z/>

とある学園でのことです。

2011年12月23日01時49分発行